



猿さるのこゝろ、
甚こゝろくこゝろ四

秋

秋風や蓮をちりちり花をよみ

不知
人

世尚よ武たけありまここ申まりし素堂すだうり

秋風の立以池中の蓮をよみ散仕是たおく一輪の蓮
を咲残りしるしをせえてはのちうきまことお向みしては
た蓮花の盛たるるるるやなかり失て秋風の吹渡りに
静るうきぬるるる物も暮るる月日をかこらる他津の
一輪の蓮を咲残りしを散りてしを秋も中を海をよみ
とたのちりちりするるまよきよ味少し一輪の蓮をよみ

と云ふ字の多きは如く其意の多きは八枚も大きくする如く
身の色はよく赤いもの多きは秋の節風のそれをいふなり
色を白化するに際しよふ用なりうへは根ありてその色は若
荷のそとくして大ひきものも今俗に花と云紋に付て之の意

くひ 菜や猪の外芝の起り 去来

くひ 菜や猪の初の花力を入る可やく味ある一外猪の味
の芝もよく赤い秋と深菜の赤い色を起り
と云ふは菜の味をなげすくく眼がふらふらして其の
のそと思ひやると初の花を起すなりと云ふ一外猪の
味の芝もよく赤い色を起すなりと云ふ一外猪の味

亦も揚ぐる舞一お心の付境をよく味と白化せる肝要
の場なりと云ふなり

大比 麩やと、好 菜やと、野 薑

け 白菜の味と子孫伝へんと子孫市を思ふ合せて其の菜
ひ菜の赤いものと心も赤い一好菜市を思ふ合せて其の菜
と他を探りてその好中へ運ぶ野菜の赤いものと云ふは
その好中を生くかお大比麩やと云ふは其の好中を生く
の電鑑とくは好中はの好中を好中と云ふなり
さすべの子孫を思ふと大比麩と云ふは其の好中を生く
と味もよく大比枝よく叶なり

に物もよみ思ふもあらずもぬらぬづる木もぬらぬづる
思ひも木の多花も感ふもあらずも思ひもあらずも
思ふを押して思ふもあらずも思ふもあらずも
かゝり又今もあらずも思ふもあらずも
あらずも思ひもあらずも思ふもあらずも
新垣於遠集ふ七夕の思ふもあらずも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも

七夕やあまのいづらにこそぬ下

伊賀元年 杜若

思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも

下して思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも

こゝやこゝも何ぞも思ふも思ふも思ふも思ふも
去来

思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも

朝の思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
風麦

思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも
思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも思ふも

せむれハおゝ一得さるる一子差お別の法界を祝するの句
こときり舞一とら江湖集の韻を書れも杭州の玩和尚が曉
窓とつづ顔ひ曙色絶分眼々明残星無復透疎櫺誰知
竹屋茅簷下尚有巢松鶴未醒とつづ小思公合とつづけ侍
句の心ハ一二の句と曙が絶ふ分とつづ諸方が成て夜分の中
に危星の光が殊窓へ透り入るまれば最早何けやのふ味も
おまゝと遠る残星とありと云意の三四の句ハ既に扱ひつゝ
ま今も眠りのまぬれ入るあますと思ふたれば待りあをけ
屋茅簷の下に松に巢を作りしと語はまが眠のまぬれとつづ
とつづ語ハ人月の諸有をまをき切たる小依て安閑無るりか眠
あること小思よりして曉窓と云語の人を雀に確言する詩あり

小溪梅衾詩ま白雲一斤寒於水口谷松窓伴鶴眠とつづ
境界とてとつづけ詩句の趣を考ふる時を先を一掃して休
句とありまが軒の松小思木々小語ハ曙を起し眠りあると
入るの諸有をまをれとつづと思ふと小思有と解れと
朝白ハ夜起り成無花咲てあるりよと子差美あふの法界
ある成親するの句と小思ひとつづと云ハ物形形影のたま
成も味ゆる

燕舞やぬるこけ草更のほろりま
及肩
乳白の身情を可守ギ一とつづ句作ねるこをれとつづ
せむれとつづぬるこけ草更つれてつづとつづの情ありとつづ

高燒巻ひるおとと ねりか 千那

外小工むすまやううの情まふに淋しあり暑りて得
かゝる情も高燒巻ひるおの淋しきほくもよきや
こゝろみ成探りてよき物とりあふれぬとて
いふ小柱といふ一字のぬきとてまじりて
こゝろみ成探りてよき物とりあふれぬとて
いふ小柱といふ一字のぬきとてまじりて

とてもぬく淋のある者や 煨雨 史邦

煨の字は煨の字かびと訓する字なりて本草綱目は梅雨或作煨
雨言其沾衣及物皆生黒煨也俗よつもと訓するはまかて

とてもぬく淋のある者や 煨雨 史邦
梅雨は混して穩なるは霖雨又ハ霏雨と書む一は梅雨
と書む秋乃も雨降つてとてまじりて
かゝる情も高燒巻ひるおの淋しきほくもよきや
こゝろみ成探りてよき物とりあふれぬとて
いふ小柱といふ一字のぬきとてまじりて

とてもぬく淋のある者や 煨雨 史邦 且藁

初花とす時秋葉のていばはららと風ふはらばらと
形をまの侍やがけはららと風ふはらばらと
字はすらす葉のうらやう風の吹く生るは母冷やうらやう
すこ〜曇〜

秋風やと〜も 落らうこ〜も 子尹 三川

秋風やと秋風やう吹成聖也小保めるは母よ〜吹成とも
落らうこ〜も 落らうこ〜も 落らうこ〜も 落らうこ〜も
秋のこ〜く 秋のこ〜く 秋のこ〜く 秋のこ〜く

送ひ子に親のこ〜りやすき原 羽紅

人の親の心はやみふら〜秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼
輔の歌の心は通ひて果もあさす〜秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼
心よよひ子の親のこ〜りやすき原〜秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼
一句の遠成備る〜秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼

八瀬お〜に 遊ひ〜て 築〜ぬ 文

あけ〜る 序〜ふ け
よひ〜く 楊の先お〜る 凡兆

詞をす〜る 伝へ〜る 葉を〜る 云ふにけ 句の先〜る 秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼
あ〜る 楊ハ俗ハふ 天秤棒の〜る 秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼
ら成りハす〜る 秋〜も子成おふたふさよひぬるはれと兼

云々を扱の乞いしふ曲やしく為原と爲りて行日言み
よやうり

つくしよううくうにひえりし

山ふて知七ふあえ

君うよもすしる成ししれ為 去来

ひこしふ山を家より日見一通り向の峠に知七去来より
し長崎小住す去来又も家の産かしく向升平次郎と云父と
彼地祭酒の氏族にして後に京師の醫官とされり去来は
次男かして何がりの殿下仕へ文武小達し又醫學攻まり知
七はと男かして古くはなれりて山さす去来城送りし年より付

の吟を爲のまねく子をいりし古歌のまきくをくしははの尾を
のりよりおとみはけし出ては行くし何り又古今をまかしの
まの神をすくは徳の出ては行く神とてやむをよき句
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを

草刈ふれり田ふり 平田 李由

萩の歌を諸子よすしりて高きをりあそびのあは白き
刈刈思ふやりての吟を又萩のむよ高き
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを
まをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまをすくはまを

云々々々句とある也

元禄二年八月小伏せられてこのく
らう三載路あかすけ御しなるよ
かのふまていさう侍りいせまを
達なるよ

いつくふらたふれ師も三秋の原 為良

け句奥のけ御の句よりして前の言葉の山と云句のほみせり
細通おを行くしてしを入集の時為の添刺せられし言詞を
いさう侍りてふ煩入るるを行くしてしを句をよくけり
を何として今の五文字を連ししやと考れ山を集りしつ
くから收めりしてあふ伏むとありふれしとた其の意を
よまれしは持おて又一段の事柄なり

桐の木ふりつゝ鳴ある塙の内 芭蕉

け句お心の解一持かたはなして又人々の言葉はひかた
境之又け句お切字の事色く解く人何れと云ふも説く
ぬく影屋と云河越よく心持て切字のぬくぬくと云と別を
懸し塙の内より青桐おいと云く延ひ育ちたる小其家様
け句毎桐影の事さう鳴る思ひやらし句之塙の内とて外
よりお母の事と云ふや句之字もあつてせんしと云ふ事
所遊玄の境よりしてその境にいふはあが

雁のかし田小みりて寝る寝がとやれとてくし其角う終焉
の記を記し中々そのお夢のよふよきとてよせしものなり一はまの
又一派のよつ海とまをひひて格ふみけぬことさきいりては望田や
とかきくくられよるよしりて考く味やぬしは伴蓮門の真句
あり上達のべい念ひ成りて境を作りたる舞しお心の入ら世
念想ふしとてみでよき句とも且つたおくお出たるものなり
これお心お教ぬるには念志の場を諭さるものなりお心
これまよひのよきものも心お成りて一句とてまよひ自然り
惜みよしり妙のよきものなりとて考く再とて備しり念ひ
しちにまよひお成りて求む舞するものなり肝要とてまよひしり
考くまよひの場はまよひ

海士の屋々小海老小まよひしりいしり 全

いしりと云出に上古かろるごとくしり出かして漢名ハ龍馬と云
頭ハ心かろるごとくかろるしりかろるしりかろるしりかろるしり
鰻の尾を曲る形のみしり一系まよひとて云くどむしり云の考
考ゆやまよひしり海老かろるしり足もかろるしりまよひとて
されしり句の中海老の中まよひしりしり思ふ夢の海士とて
しりを奇工の句とてまよひしり前句とてその位四五派のまよひしり
考くまよひしり同日に備ふしりしり去来抄に猶もまよひしり右の二句
の句一句入集まよひしりしり句のまよひしりしり九兆ハ病名とてまよひしり
まよひしり海老にまよひしりしり句のまよひしりしり事とてまよひしりしり被にまよひしり

於て下げ上りしとてあやうし一実著のこゝろふちあむむが
んやちれなふあふそひひるまやといふ詞をみておま文
字をとまねるまつ海城まま代正屋甚門の風祖と仰ふ
夏こゝろ一詞の要とまきしとあやうしつ海城中尋
常の及ふ字たゞ又甲の下まきりしとてあやうし
境の猛タチまかりあてまきりしとてあやうしと甲まきりしとてあやうし
一次に後田の候を得するまきりし言みに実著戦死の心情を平
家物語盛衰記まかりし海城まま代正屋甚門の風祖と仰ふ
甲曹の文字顛倒ハ俗智小徳子とあやうし

菜白田や二毛ふち中乃虫のあり 尚白

け向虫の秋より子伐つてまきりしとてあやうしとて菜白田のまきり
野よりまきりしとて二毛ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり
かこま虫のつらまきりしとてあやうしとて菜白田のまきり
まきりしとて二毛ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり

くさけりや磯土ふち中乃虫のあり 風愛

日暮色時候の向かりてくさけり虫の磯土ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり
田のまきりしとて二毛ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり
くさけりや磯土ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり
ハ吉一とてあやうしとて二毛ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり
に説くはとてあやうしとて二毛ふち中乃虫のありとてあやうしとて菜白田のまきり

いせふまうてくる時

あふ月也矢橋ふ海の人さぬん 七人 千子

け句系よりいせふ系得する時女の情より八月の海の時
ある湖ありまゝ風波のたぎられを舟小舟ふりあを矢橋
ハハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
と思ふ海一とあふ月やといふ月也と後八月やとい
彩まゝ又さハ後句もとり也と一一句の姿情よく
備る句一物句をけあおてる句一後考をまらし
備る句もとり相まふの矢ハ係をぬりて作りし

こけ月小美魚のちん海をくらり 之道

け句初心のな着せぬ所ありて解言術の句こそ解言術たるを
以て道門の一格とする句と心持あり一向きハ吹く一と計
するハ又小美魚がり一養魚の字印本小フカと仮名を添
るあり物又解一給一思ふにけ養魚の字又フカと訓ハ決
まざる也又フカと訓一ハ又解言術もとりしハイカと付
る仮名の彫遠ひもとりし思ふイとフと遠いもとりし
本草綱目に烏賊魚乾曰養魚と云ふりされハホシイカのものに
して今もすもあすも是とも乾鳥賊とも文やの解もあす養魚の
字と用いて只イカと讀むとホシイカと領解させる所又能得

のくくのまはるお白きハ女のまはるハ三日月にイカも類と
リリと云るはて美物俗に月の盈缺ハ従ひて満減
る天地自然の理なり眼に之をみるハ蛤介の類は
月の盈缺ハ従ふ不顯然なり既に本草云これを見
おの除を採りて思ふまゝぬらやして眼前人の見る所の
以て如を俗に云に俳諧と云るはホシイカの形と云
ハ三角ありて條物の形と云て山ありのころ一方をかける
形ありてこれ三日月の形と云てその満ち減かまり期を
と云るなるは自得より警備を在りて美物皆十分
に満ちて缺るの如し月の盈缺ハ月を示されども愚小悟
るはるはるして欲と極と益と云るは益不足と云る
いゝものなりこれホハ身賊魚中おるをいふと研ぎ
する句と知るはかくしと依るはかけの魚頭を隠し
と解くは人多くこれにて又白言着るぬ又フカ
ハ魚ハ較の類なりてぬらぬと云又西玉ハさやと
ぬらぬと云るハワニガメと云るワニフカ撞木と云る念佛
フカをいふがぬ又鱧鱒の両字を共にフカと和字言
ふ訓これとこれとフカハ別魚之フカハ鯪魚沙魚
の二類なりと知るは委しきハ俳句に云るハ略も又俗
にすゝめを云るハ冥ハ腹にして影ハりてはさしと云白俗
従て云くハ又缺る云るは要白眼ハと云るは
おら三日月ハふぬぬと云るは

粟稗と月生所なりぬらん月よ 半残

粟も生半稗も生半世の中ハ月生所秋とありたふさる空ハ
新月のまやると思ふ情すしゆ十分の秋と云ふさるこぞ
望しとらん月おふ新月といふ中一中秋十五おふ海の
はりてさるとおゆと云おゆお出る月お新月と云ふれ
はとらん月おと云あるるさる

月見せん伏見の城に於 郭 去来

伏見の城ハ豊大園築かみて関ヶ原の役ハ賊將の為に
修るに後築といふも修なく廢してとやけけとも結
構の修るに計ハ修築といふも景色ハ思ふ合を伏見といふ
名ハ両合をとも持郭に月見せんといふもよつ海の外ハ
云なくして又言格といふも

夕物をサカ合ふおぼして

たりしるう 松の豆もえよ為月お 伊賀 土芳

たりしるうの五文字塊にして為月おと云ふ受動ハ言葉
書の用意にありし 松の豆もえよと曲にして其芳合の用と云ふ
月ハはるかに夜はる為月おの殊ハ菊を指りして心結し
たりぬさるよと云ふはしるさるおにすしるたりしるの
お五匹し菊の對してのこもいと味しる

も作りも子屋一すまわしと申送るもまかりて去年
の月とつゆ神魂まうと歩中舞一今年花似去年好
去年人到今年老と云意をよと取りて今年月似去年好
去年人到今年老と云意をよと取りて今年月似去年好
美人邁兮音塵闊隔千里兮共明月白氏文集三五夜
中新月色二十里外故人心をく作りとく一趣も思ふ合さ
今秋の月ちつとんば去年の月そふと八向との作ホ一又
老と云心と借中宵とつとんて世路人の宛老一や五言五
縁と破くつとつとん一夫も自得の向うとく送作と

風のおもや空も月も心
凡非

秋風の吹きたるもよりの月空は一夜の月をまゝに
おとつとん意をたつとんやとつとんおとつとん
情成合はたつとん

ぬりこもてこよひもありぬ月のこと
尚白

今もぬりもまてこよひも際りてりやあくお司にあつとん
向にしてぬりもつとん魚も青もあつとんぬと云はる
妙手の上にして何れもあつとん向成り面もく云はる
つとん

向の能きや月も心
曾良

月を祿むるふよきかたしめり哉向のよき指と云たるを
旅店と云すしるしを月を祿むるに際し終りのしるしを
やうかに傍りてよきかたしめり入の事と云ふは終り
のしるしと云ふはよきかたしめり

元禄二年つる、お供の月哉とて

元比の明神小指持り二人の古例と

月清一持りのりる砂乃上 芭蕉

矢張り勝のつる白やうて氣比の明神と越前の一宮に
して仲哀天皇の霊と祀る氣比の仮名書りて本字は
節殿の遊行上人の時宗やうて相州藤澤駅にたりて藤沢山

清洋光寺と号す開祖ハ一遍上人也細及云上畧社歌神志
て松の木は月にも入る、誓之の白砂を祿と云ふ
往昔誓切二世の上人大教発起のりりてんくはま城切
土石と云ふ泥傳成かきと云ふは本指往來の好き古例
今ふくも神志にも所と云ふはこれ故持りの砂
持りて傳るを直す主のわくも云ては希文を畧して
詞をよ出し、白意并と云ふは、明神の文と照し、今も
清中、二世の上人を、随阿上人と云ふは上人も代々他
阿と云て通稱とす

仲秋乃今終子を送終寺して

かゝるおの月とこふりり如き道遠 去来

猶子ハ甥のふかゝるおと影の如き月に対して
古今を思ふの作ハ詩歌連綿とも同様に申ふかゝる
おの月とこふりりといふは実情より出し句とて
も行きさへおの月とこふりりといふは哀傷言外
に在る也

明月やみよの寺の茶の林をくら 昌房

まよの月とてはむす小其は先は清の地にておとさう
なるは月とてはむす小其は先は清の地にておとさう
にしてとふ句に月影の白はさうもなく低く茶の木の根
くしにさう種なるは月影の風景思ひまよの月とて
又ヨの月とてはむす小其は先は清の地にておとさう

月影を人の碁ふいそかへり 羽紅

月下の持衣は待くも葉するにや成人は碁ふいそかへり
と云を新くしき月影の碁は猶望し月とて碁ふいそかへり
う月影の碁は待くも葉するにや成人は碁ふいそかへり
月の外はよの月とてはむす小其は先は清の地にておとさう
をいそかへりといふは月影の碁は猶望し月とて碁ふいそかへり
おとさうといふは月影の碁は猶望し月とて碁ふいそかへり

一鳥不鳴山更幽

物の音いりたりたゆまぬ 葉山子歌 允兆

一鳥不鳴山更幽 詩之行を影ふく句改作する
心持を以て其角より奥をなす行り允兆の句又よ
まをほりて云へし更ふ改るといふまやう有れり
すりハ猶ほふし云ふ之樂ハ用み寂しきまの寂し兆
取ハ山間田畑の淋しきを思ひたのつらう秋意の余情言外
の字を採りて又ヨる葉の葉山子を云べしてさう倒し
とハ句他の淋し秋意の餘情を云へしと云ふこれ
ハ山田のちやうと一鳥のありとなくさぬ寂莫の情は
可有物の音と云不魂の都て詩句を行きて若向する
俳諧眼作りの格も一

むつら 柏子とす里非楽 曾呂

増山并小里非楽十一月之去本允兆の誤りや又存りし
まのちハ大徳祖翁も増山井を井いひ云ふるとま温故日録
ハ十月ハ大内の外なるに記さるる句と云ふや
秋小生やハ誤なる句 南村もなまの季小月ハ大
内の非楽の式也有採らむむつら 句作りてさう
めいて幣すさぬと柏子と云へし句作りてさう
云字ハ食するの字つゆ自然作眼系みへて寂情の場也

旅枕麻のつゝ合ふ軒乃下 江戸 千里

山册旅枕の枕様を形容する自かして枕と云ふつゝ
合ふると云ふは合ふれば軒の下と云へるはつは旅泊茅
屋のよめと云ふつゝ旅の角よりつゝ合ふ縁きざし家に
此屋の棟き枕つゝ合せて暮ると云はれり是てまゝも縁と云
合ると云はれり軒の下と云へる内外のよめと云へるは
言ふに新婦通く暮のよめける山店の旅泊茅屋のよめは
よめやると云はれり旅の角のつゝ合ふ縁の場と云へるは

鳩ふくや旅枕の暮あま白田 珍願

鳩ふくと云ふは木抄堀川百首等小言と云へる説く多し奥
儀抄袖中抄本考く合ふと云へる増山井小袖中抄を引て山旅は秋さ
るはなれり人鳩のよめと云へるは合ふと云へるは鳩のよめに
らはれり是を鳩をぬくを鷹とぬくをたつと云へるは鳩と云へる
すくと云へるは旅枕の傍か暮あまの毛の寝ておくと
かんせいのよめと云へるは山畑と云へるは景色の白と云へるは

上りく下るるさや穂の天 凡兆

此句は景やして秋の空のよめと云へるはつゝおとせると云
はれり天のよめと云へるは上六辰巳風をどめて北へ吹きて
るに下の風はわたりて白雲を有るすのよめと云へるは

上下の長さをふり何るべきを極向きてふつは又
賞すゆき

鯨約はとあり〜 鯨 半残

は句一言云下〜 鯨約はとあり〜 半鯨つ〜 六いふとひ
びく子も是鯨ハ秋と以て賞す鯨約ハ秋はひら〜
鯨鱸ハ大小ハ〜 名も違ひなり依ては句なりと味も句〜
江戸少ハ一年あるよを問ひごと云二年あるを問ひ〜
二年あるを問ひ〜 徳州ハ大小ありて名と異なり
最大ありのハ徳州ハ大小ありて名と異なり

おから間のうしろをさき 鯨の智 尚白

田舎間と云ハ五尺八寸をいふと京間ハ六尺三寸は句文字も
あふよつて句意を解するなり〜 心も通〜 竹塙をよ〜
味つて一句ユミハ作〜 け句ハなる間も厚なりとい〜 句ハ
〜 味ハ佳佳佳の字のをも言さ〜 句ハ佳佳佳の字
をいふ〜 佳佳佳の字ハ〜 句ハ佳佳佳の字
間の厚なりハ佳佳佳の形容〜 又一段の字ハ〜 田舎
間〜 句ハ佳佳佳の字ハ〜 句ハ佳佳佳の字
云きて一句の字ハ〜 句ハ佳佳佳の字ハ〜
ハ主人の句意を〜 句ハ佳佳佳の字ハ〜

かかへし心なる哉

三葉を切詠よけしあもなうりり 其角

秋の寒情の寂しきを以て本とすするは九月乃葉の
了は秋情の寂しきを遁きて女しくもやるるを
含めし秋葉を翫して百葉をたりの後ありの外
秋葉にまじりてこれハををキ角の胸おれすめてけ
を作り出さるるは秋葉の切し詠のまじりにしりん
のなるは秋葉の切し詠のまじりにしりん
ぬは秋の寂しきを含めしをなうるは秋のまじりに
にまじりしをなうるは秋の寂しきを含めしをな
うるは秋の寂しきを含めしをなうるは秋の寂し
きを含めしをなうるは秋の寂しきを含めしをな

高土手小鵜の鳴日やせうちきれ 珍碩

高土手の白にしりん玉子のうすし際ちすまは小鵜の
きき鳴るをなうるは秋の白きのをちきれて風を
行い
つれ秋の景色のうすし玉子のうすし際ちすまは小鵜の
ひらき秋風のうすし玉子のうすし際ちすまは小鵜の
あし又秋風のうすし玉子のうすし際ちすまは小鵜の
をいつくしと日いつれちきり秋の風し想のうすし玉
子のうすし玉子のうすし玉子のうすし玉子のうすし玉
子のうすし玉子のうすし玉子のうすし玉子のうすし玉

紅白の色よりや〜と早々の白の谷馬の板橋から眼にお
子丈のさ〜は漲るこたけものしくか〜こさるみさき〜木の足や
るすぬげふまをまみかた〜

乳さむー竹切山のうすみまふ 凡兆

竹山の青く見えぬさよふ〜すもを守る〜さきよの父や
げに乳さ〜ささぬるぬま〜のまも〜

神田家

さね〜しりひれの柏子たけらぬが
神田家の鼓〜しき

柏子さ〜あつまあ〜

花す〜さ大名をよつり 外 嵐雪

され〜しりひれの柏子のたきさすおとハ蚊足う登向か〜
神田家故ゆ〜これハ又乳白を附て神田家の鼓〜しき
き〜し〜ささぬるぬま〜のまも〜
ま〜し〜や〜し〜ら〜つ〜ま〜あ〜ら〜が〜柏子か〜さ〜あ〜ら〜
拾ま〜集〜し〜つ〜ま〜あ〜ら〜が〜柏子か〜さ〜あ〜ら〜
は〜い〜ま〜あ〜ら〜が〜柏子か〜さ〜あ〜ら〜
と〜い〜ま〜あ〜ら〜が〜柏子か〜さ〜あ〜ら〜
ま〜あ〜ら〜が〜柏子か〜さ〜あ〜ら〜

心合せくみあはせ大名流より勢國の勢録あすかより
生するその行列を花すすくくえきて大名流をみふも
月日るよりふ一白のまつ海へさるらり里和樂の白を奉迎
り秋の四五日弱るすくまが 丈艸
たりの備かしてり秋の情言外みたるあし弱ると云ふ
魏の増かして五日といふくくつろいなる採かしてやく
枝打さぬを合ゆるり秋の合せ外か物さくく海し
言外たのぶさねく

立出る秋の夕や風ちりー 九兆

け句秋の夕暮のさめと形容してうの淋しみの上と探して淋し
者も立出候ちりりつてもおちくとよめれるなくと 海をさる
さしおま出てんれはれちりちり風ちりーのまさかめくさる
らんと出まらりくと云ふ一句のまつ海へやとくを察してのこを
そせー句くと味あぬー風ちりーハ段書きハ風疹と云ふの
かして俗ハ風ちりーと云ふ名ハちりせん

世の中と勢録の尾乃ひまはし 全

勢録の尾のひまはしと云くちりて世の中の人をたれと
とひまはしと云ふまはしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
かつと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

裏たる句一、笑を求むるハ、訖を借す句一、これ怒一、昔
と悔る意自然一、句を以て欲、与梅為友常憂不稱集
従今斷火食、飲水讀僊書、と作れる陸游、詩の趣を以
思ひ合せらる候

上瀟の山莊ホありく、るに候、なりて

梅り香や山路、穽のる犬乃まづ、去来

詞書の意よく考合て一句の形容を味ふ一、やんるなま
ゆ方を考、敬一、なる意言外ホ、め、て、山莊ホ、ま、
時梅の蓋ホ仕候セ一、なる句一、因て梅り香と、な、
な、と、り、る、と、清亮の芳名ホ、な、り、て、已、恭謙の形、

山路分る、特犬の、一、這、一、句、作、り、
て犬の、ま、な、り、と、し、形、ま、な、り、と、し、
犬の、ま、な、り、と、し、恭謙の意上、
の、ま、な、り、と、し、
入る、と、し、
葉、と、し、
ハ穽、入、る、と、し、

むめう香や分、入る里と牛乃角、句空

まの、ま、な、り、と、し、
云、隔、
云、
云、
云、

子良子良の句のうへに梅の木は根たつにせしむる意のなり
時節の趣合せいつまも句ひたりておほくはせり

子良解の後お梅ありといへ

は子良子良の句と成り梅の花 芭蕉

一書には子良子の俗なごらこといふた神宮の神饌
に奉仕す小女は伊勢神宮の内には子良物也と稱す
る社家二十八家ありてその娘をとりて神園をりて備す
る又坂土佛太神宮も系傳の記ふ云子良とて幼稚のを
とめといふまは娘のつとめをとりて神園を備ふるは仕
ゆるけし神意ふらむひぬむは二十三十をりて月事なり

冥監ふらむらめれも十二ありてはさるるごらこは
を辭すといふこのごらこめのおほく解を子良解といふ
句意は詞もふ云あの子良解のうらに梅の咲るるは
て梅の花は玉姿玉容たも詩中作りて清潔のたまを
以女貞婦の形容かたりてその非饌を供するをいふ
清潔なるに解する句なりてたしあつて一とてつとめ
たりといふなり一本といふより麻の言は力ありて
云外の意味より味ありてはとて素衣白袴を是れ
潔の艶姿韓駒梅花の詩は空山有美人寒林弄孤
芳といふ意を思ひ合はるる句は庚午紀行の句なり
その文に神植のうら梅一本もなりといふはあはるる

し春月すすのかりし。夜昏の夢を十分ゆき七
字のうちユメ夢より言舟の情はよ味ひてさる舞。暗香
は梅の香を指サシてふまよし詩を都ふし。たのむらもあ
その待叶。陰情を揮いて自作する子孫たる舞。おれは
たそけをよのにおとす梅の香。ひひさくおれと作して入
相の障とすもさるかに花昏の内。とせや梅の香の白
はるは母よりく。笑乱れる。梅の香を思ひて。子孫たる
よ。梅の香。梅の香。十分の白く。とせ舞。浮初の陰情を
揮いて鏡の影とせ。とせ舞。

武江おもむく。猿亭の残夢

梅の香。とせ。窓の細月や。周乃梅。し。品

残夢と。し。夢。ハ。早行サウカウの。夢。か。り。て。猿亭を。お。よ。び。と。ま。ま。
生るに。い。ま。の。ま。の。人の。夢。乃。覚。や。ら。う。て。夢。う。つ。の。境。を。と。こ。
と。す。ゆ。り。と。され。猿亭に。梅。あり。か。ひ。なる。朝。ま。る。ま。の。白。く。
と。せ。る。舞。し。機。端。揮。お。の。白。く。梅。の。ひ。も。院。の。細。月。を。
梅。の。香。の。白。く。お。よ。び。と。め。心。も。情。く。院。の。月。を。計。算。
と。め。る。夢。と。せ。る。と。め。ら。さ。ら。う。と。心。を。と。め。ら。さ。る。舞。し。
周の。梅。の。香。の。白。く。ひ。も。猿亭。の。夢。を。と。め。ら。さ。る。舞。し。
う。び。と。め。ら。さ。る。舞。し。と。め。ら。さ。る。舞。し。と。め。ら。さ。る。舞。し。
梅。の。白。く。ひ。も。猿亭。の。夢。を。と。め。ら。さ。る。舞。し。

幸未の〜 孫生の〜
よ〜 山ふ日られて極らふ母の
志きりありり逢と旧友荒や世
くぬくの荒や白ひを葉内者
りふ句を日〜 山ふさるのやうに
おのひわれ〜 おふふれて感動
乃は志〜 山ふおの母と
ちきとちのおの荒や〜
ま〜 山ふ〜 山ふ〜
風程を志〜 や

春さけりて又一白ひ 育の 梅 嵐

詞曲の要を心得て句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ
日暮りて梅の白ひ志〜 山ふおの荒や志す句の真情と
思ふ出〜 山ふの心お思〜 山ふおの荒や志す句の真情と
おのの意を志す句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ
さるおの風程の執着心おと〜 山ふおの荒や志す句の真情と
〜 山ふおの情を志す句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ
ち〜 山ふおの意を志す句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ
おのの意を志す句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ
〜 山ふおの意を志す句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ
〜 山ふおの意を志す句情言外の意を志す趣しや〜 山ふ

一して有りて後と同一して有りて是なるは心息の儼然なる姿
とて有りて一して有りては心息の儼然なる姿

百八のうけて迷ひや周乃むぬ 其角

百八のうけて迷ひやと云ふ百八煩悩の迷ひを明してその煩
悩消滅の持たる諸行無常是生滅法生滅す已寂
滅為樂と消散するを會ての修するに是を了んて迷ひ
周のうけて有りて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
の体とて有りて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
本の母入りは心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
るあやかり有りて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清

されは煩悩の迷ひの周より心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
らんやとて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
やめも多れぬ周のうけて有りて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
るあやかり有りて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
迷より心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
かたも心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
いささかも心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
の場も心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清
とて有りて心息の儼然なるは赤條のうけて有りて清

七種や跡千うらも 新うらも 其角

七種のさやしきりてのたみたるさきのさぶさるひは
新鳥の鳴りしるる句葉しつとやしるるさやま
み合してあしや鳥もさう進出るさきさきさき
七種はの鳥と梅句しつとさきさきさきさき
さき曲の増え

さきさきと 新のさけし 根芥哉 文州

眼前の形容十分の句かしつと言語の優りさきさき
さき一句のさき情をさきさき又さきさきさきさき
根芥はに
根芥指のさきさきさきさきさきさきさきさき
西条に最上の件

うすらひやわ川さきさき芥のさき 其角

うすらさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさき
外にさきさきさきさきさきさきさきさき
河内の長堤の長堤のさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさき

おのゝぶらして一句さへもとさる下河州姫をさる五元
をその解のあゝ〜載する〜

勝とハ松のくらさか月おのれ 全

静休の糸の自伝の光景の月の光景を夜にまぬ心を
よもを結んでかゝりもよみごころを春月の本意ハ勝ロウく
とくは〜と〜勝とよみと〜作〜さる〜と〜云は自伝の意を
〜と〜と〜一〜事をも〜と〜さる〜外ハ〜と〜と〜と松
ハ勝と〜と〜自の向あまは〜と〜と〜と勝月を招き
〜と〜と〜の景も又〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

勝とハ松のくらさか月おのれ 去来

静休の糸の自伝の光景の月の光景を夜にまぬ心を
よもを結んでかゝりもよみごころを春月の本意ハ勝ロウく
とくは〜と〜勝とよみと〜作〜さる〜と〜云は自伝の意を
〜と〜と〜一〜事をも〜と〜さる〜外ハ〜と〜と〜と松
ハ勝と〜と〜自の向あまは〜と〜と〜と勝月を招き
〜と〜と〜の景も又〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
おのゝぶらして一句さへもとさる下河州姫をさる五元
をその解のあゝ〜載する〜

雪や下駄の齒ふつゝ小田の土 九兆

け白又暖和の時節を^{イテドケ}見せり凍解の河畑畔をのよ
言ひおけり

雪や窓ふ灸をすえな^{伊賀}り 巢日

是又暖和の雪や^{ヤイト}り採燻の匂^イと東向の窓は^イり
灸すえり^イ雪ふ^イさ^イ毎^イよ^イき^イ天^イ氣^イと^イ六^イ言^イ好^イみ^イす^イ又^イ後
行の志^イり^イ三^イ里^イの^イ灸^イす^イえ^イる^イま^イの^イ採^イ採^イも^イも^イ也^イ

やぬのを柳と^イら^イ六^イす^イり^イり^イれ 採九

蒸ぬ^イ柳^イり^イ積^イり^イたる^イ雪^イの^イ景色^イと^イら^イふ^イ風^イ情^イも^イう^イづ^イり^イれ^イ
す^イれ^イか^イの^イ門^イふ^イり^イり^イり^イす^イり^イ柳^イと^イら^イふ^イ姿^イを^イ持^イて^イ風^イ情^イ
り^イり^イと^イ白^イの^イ柳^イの^イ匂^イと^イ又^イ雪^イの^イ匂^イと^イら^イく^イの^イ心^イは^イよ
新^イ雪^イと^イれ^イと^イ祖^イ為^イ一^イ眼^イの^イう^イの^イ入^イき^イま^イれ^イの^イ窓^イの^イ匂^イ
と^イち^イす^イぬ^イと^イ又^イ雪^イを^イ中^イま^イれ^イ採^イく^イ遠^イく^イも^イち^イら^イな^イさ
に^イあ^イり^イも^イち^イら^イぬ^イと^イ蒸^イの^イ雪^イと^イら^イふ^イ姿^イを^イ持^イて^イ風^イ情^イ
の^イ心^イは^イよ^イと^イ白^イの^イ柳^イの^イ匂^イと^イ定^イむ^イる^イも^イ也^イ

け^イ痛^イと^イら^イる^イの^イ持^イへ^イり^イ柳^イり^イれ^イ 江戸 卜宅

痛^イ柳^イの^イ匂^イと^イら^イる^イ子^イ柳^イの^イ縁^イも^イれ^イは^イる^イの^イ痛^イを^イ
さ^イる^イの^イ痛^イと^イら^イる^イを^イ持^イへ^イり^イ柳^イと^イら^イる^イ

リ〜の〜

垣〜に〜す柳江 遠水

柳を動かぬ白ゆ〜外〜は柳の枝を
垣振子〜引〜お〜
た〜柳の情〜

よ〜川 極子 柳子 尚白

横田川ゆ〜柳〜思〜極〜
小舞〜作物の邪〜極〜
極〜情〜

より〜理座を道〜横田川と云草津と右部の間有夫別

青柳の志〜れや 鯉の 住伊賀 一 啖

け白又よ〜す〜
者も〜判者〜
をぬて〜
つ白よ〜味ひて作〜
の志〜れ〜
書く思〜
亦〜や 鯉の住〜
小姿情を備〜

うゝややうーおもひ切時猫の意 越人

去来抄云曰先原伊賀よりけ句を去送りて曰心小風特ある
りの一語口か生れんといふるあり彼ら風流は句よをりて本
情を顯せりといふこゝろに越人の風特心あるるはこゝろに
ともを去れりといふけ句よをりてその風特心の本情と
去れりありたりと稱美し多ひて去来抄後葛原の条の
中送りたりありあり又去来抄云是よりさき越人の名四
方は高く人のめりてを去る右句多し然ども定まらざるに
て本情を去るる六言云りといふ去来抄心小け句換ふ
の句こゝろにけ句を去りて去と祖家の言ひいふ

今と人々稱美し句より一語よを句こゝろ又後者の評を
去るるこゝろにけ句を去る人をもけ句評をよめるあり
るけ句のな情を解得ぬる也又祖家と去来抄評を
解し送りて離りのめり心はるるや後者いふるあり
うゝややうーと云五文字の儀を去る強^{ゴウ}なりて色情を勘破せ
しを去るるを去るるや後者いふるやつる程の意を去る
思ふ切時を去るるの付ありこれに人の猫もけりて去
るるを去るるや後者いふるやつる程の意を去る
と去るるを去るるや風特心の去るるを去るるこゝろに
あるるのけ句を去るるやつる程の意を去るるこゝろに
の目上よりけりけ句の風特家よりけりて深く探りて味

あまのつとめをたづねて一白作りあやめて最ふ家のゆづ
まに定まふの歌いひもや一せむもよりのけのしづのま
ひさしよあまの夕とをこりあを一精し歌の情をすしよ
て節力の心よとあつとあつとされけりあまのまを
けをあまのまをこ世評のめいひあつとけはまをすするまや

うさふ友あかすれて猫のえをうめ 去来

空まふといひの魂や一白のあまの情を備へしうさふ仇猫
まかすあまのれり物さしうさふ思ふ猫の情をこしあまの
あつとえをうめすし根やとやと一白のあまをこしあま
まをうめすしあまのこしあまのまをうめすし

露沾公かて餘まの當座

春風ふぬるもさるめぬ羽織が 亀翁

露沾公は仕候の時尚座の白やと春の風をよこし
あつとあまのれり物さしうさふ思ふ猫の情をこしあまの
あつとえをうめすし根やとやと一白のあまをこしあま
まをうめすしあまのこしあまのまをうめすし

那き毒のちりし白まの二月が 尚白

あつとあまのれり物さしうさふ思ふ猫の情をこしあまの
あつとえをうめすし根やとやと一白のあまをこしあま
まをうめすしあまのこしあまのまをうめすし
あつとあまのれり物さしうさふ思ふ猫の情をこしあまの
あつとえをうめすし根やとやと一白のあまをこしあま
まをうめすしあまのこしあまのまをうめすし

骨竹末乃かられまう〜も木の芽が 凡兆

骨竹末の葉のまき葉をりふこもれ穂枝のかくれまう
も春を乞りて木の芽をり出す〜いふ白にして非情のま
木も時節を〜〜いふを眼的中〜作〜白まう
味少舞〜

白魚や海苔ハ下部のい合セ 其角

白魚ハ海苔の黑白を融合セ下部使の白魚ハ買合
セ〜いふ作の場にして融合セ〜〜いふ作の場にして
〜心〜いふ下部ハ〜いふ白〜いふ〜

人の子ふ〜〜いふ海苔 尾張 杉峯

海苔者、紀州海邊出之色黄白紫而似梅花凋落乾状
故名人の子ハ海苔〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜
海苔者名も出
本も〜いふ白意也

秋百ふた〜〜出〜〜 元志

秋百の降葉也〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜
〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜
〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜

いとゆふのひとあそぶに虚木立伊賀 氷同

いとゆふの唐土も遊絲と云和漢同意に八雲用抄小春
何りて暮まし〜空のりのこと此是赤陽燄に〜春
の霽ある日お見おのが糸の行ふはにも似〜かくは存存
かげろふとさ〜の遠ひ何〜いつと春和の陽燄は〜
空中小動〜と地上を煙〜の遠ひ之句意は糸おおひは
〜おと〜の〜の〜最〜お養か〜
意は富〜を〜洞〜に虚木立〜
檜といふ句〜大木の幹〜うつろふ成〜
〜の〜中〜糸ゆふの〜
たる向〜一説に〜
まぶさ〜木〜
非〜

野馬ふ子たあ〜狐の丸 凡兆

野馬はいちやや清酒リキイ 林希逸キイ 莊子の註小野馬は遊
糸也と云たり莊子に云其急シキツある野馬の走るに似たりと
亦各身ミ之ノ野馬も亦糸遊のから名之句意は子狐
をついて疾風の野辺お遊ユ子野狐のよむひ〜
を〜かけ合〜の極向〜も野馬の文字を
ひて馬と狐との關係お〜と思〜お年小狐と組合〜
の〜

かけ後ふや紫胡の糸の存日登 芭蕉

け向紫胡サイコも糸小存煙ケムリとてふふふふふふとて湯冬ユキもゆる
所多や紫胡の蒸モク出る細く糸の如くふ芽出さる時候の魚
合も形容日景もそなと進り紫胡ハ薬料ヤクなり和名のふけ
と云雲束の俗ハおなごナゴ一を云ふと熱アツクをよまるとの名こ
初春芽を出し時ハ芝シと同く細く糸のやふ芽出さる
うなるふふふふふふふふふふの作ふくけ湯暑ユキとてふふふふの
場ハ湯暑ユキとてふふふふふふふふふふと形容ケガレするふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
霞カガ光曙アサ後殷ゴウ於オ火草色晴ハル未嫩ミナ似烟ニといふ白居易白居易初春の
詩句詩句と田田の合合せらる嫩ニハ芽出芽出のふふと云ふ小刻本の七部集
ハ糸と原原誤誤たり

いとゆゆふ白ハクのハク也也作り独活トクワツ 配力イ賀

影引カゲヒキのさそと下急シタツクとてふふふつゆツユ作り独活トクワツハさそと
寒中サムナカより作り出さるふふと二月ニハいふふふハ芽メを出さる作り
うとて早春ハルハルのものさそと江戸江戸にて食料シヨリョウハ用ヨウむもの皆みな是こゝの句
影引カゲヒキのさそといふハ暖和ナンワの陽ヨウ光カウをさそとてうとて作り
の日ヒありよりいふハ芽メを出さる堆ツマ積ツマハさそとてうとて作り
まて芽メ又またに其その場ばさそと湯ユ出デるのさそとてうとて作り
そのかぐふふつれて作りさそと一時イツハ生長シヨウもさそと思オモひたり

すを以てけの極意とす此書ハ心むく君を諫て月を
む退て蕉公羽の門に遊云又禪門に入て奥を得たり

彼岸よりさむさむ一お二おお 路通

は向実情かして彼岸よりこの時候とあらざる実意の場かして
むとおふふかしくふふか解さるるま味やあや一彼岸のりハ法華
序品直後鈔の委しく見せりまに略す

さむさむ一や岸のたつよて涅槃像 野水

さむさむ一は院人に解さるるハ形水さづく暮虫の解さるる句
かして行住坐卧只一衣のさむ涅槃像に活きさるる別の淨
衣もあつて思ひ況て相一言下に涅槃像の傍に暮虫の解さるる画
て哀めさむを形容して涅槃像とあらるるハ又形を取らざれば
ぬるさむと念まふ合さる味やあや一又毒と涅とあらるる

さむさむ一や岸のたつよて涅槃像 野水

白土作りふ建并ぶる富商の何者哉と思ふさむさむにさ
鳥の色を何やさる河原を渡さるるかすめくやひらりくとさむ
風情言外さむさむ一是本の句さるるさむさむ一は切字とさむ
祢ハ初学の思ふさむと疑ふ白さるる舞の思ふさむさむ一白の文
字さむさむ一は言外さむさむ一

まさらく今や紀のついでの層

伊賀 澤 雉

此句今やといふ現はまさらく今やの句をさす風細之紀
のみと伊勢のの趣合せに熊野の伊勢路の一對ありて熊野の
神社伊勢の神社と日本崇神の縁より句縁を配つ今やといふ春
暖の氣候を合て雨層の時節を失ふまじくまゆるよを形容する言外
に旅中田野の實景紀の層いせも層とせしよ句の傷を

春の田やなまの小草小花咲ぬ

嵐 虎

なま根の小草なまるといひぐさなまなりて春の田やなまの
出てなま春にまらふて緑をなまの時の時をれたるは春雨に山那の
草木のまらひぐさ草屋の上に生るる名もなき草をさするるなま
を得てなまるといふまらひて花咲まぬとせし

高山ふれて

春雨や山より出る雲の門

猿 錐

この山ふれすと題書よりみて山中の雲起る所より一宿せし時
春雨ふれ出する白く雲の出る門を雲門と云ふ雲の門と白作す
詩も雲門を開くを作たり又春雨のいと細く降りさすめと雲
の起る時をれ雲の中へ入るる霧小雨の如くふ思はるるものなれと
春雨と雲の出る所を山よりたるる同義の語を形容する白
くしや雲しやと云ふ山ふれとていふ山ふれとていふ山ふれと

不惟さやかざりされ〜夾の句 芭蕉

不惟さやかざりされ〜降さぬ思ひや〜され
夾の句の傳ふるを扱ひて夜の着りかぶりて目かきま〜
起もやえらるゝ紙友の才て起あしと傳ふされ〜起生
たる〜しよま中〜てかき起すのかさ〜と字ふ子細を〜只語勢ふ
〜して起され〜とるゝかひやるかひするゝとるゝ同〜まあり
原者の境界言外ふ然^{ガシ}然^{ゼン}〜

夾雨や田舎表の〜もた 鯨 史邦

鯨ハ鯨の俗字とぞと〜後歌ハ夾雨ハ田舎表の事由後合せしれと
一帯の西原にそび〜て鯨と〜ハ子扱〜と〜何となく鯨と〜の
案もあ〜が〜田舎島ハ攝州西生郡今ハ北濱と云

夾雨のあゝやたのふなく 雀 羽紅

羽紅尼の句情実ハ女性の泣けと男子の句よりや〜と何り〜
すや夾雨の晴際と〜も己の刻前の機嫌あると〜物起
ふ際も夾雨の朝湯ふ雀の才事と〜たの素と〜上れハ
〜や〜と雨もた〜〜か〜て〜す〜日ハ朝も〜西も景も言外ハ
〜て朝湯ふ雀の鳴さ〜ハ夾雨の何〜と〜と〜と〜

泥亀や苗代水の畦つゝ 史邦

苗代田の言外小見の舞一も苗代田の畦をのこころつて
出る泥亀か代かきたるさめとみかけしるさめもたる舞一畦
つらふと云所魂の尾を泥中ホ曳のつらふたる舞一泥亀
是下る所方つらふれどけ白りと畦うつらふと云一見せらと云
本抄に曰猿の探るの時予供て畦つらふと書先師云畦
つらふと云形容風流各別之舞一畦うつらふと云舞一も
よあり肝要の気色を誤るる業者の罪のこふらへ白をせら
たろと云けらるなとと採端あかりと云と云一これの畦うつらふ
舞一氣色を採る舞一

蟬と母の木舞の竹や虫の米糞

昌房

け向意外の微細なるものを考へ生一と云と云思はれ共さあはれと云
舞一はサ身屋眼前の場ありて実地より作り出せる舞一
と云破壁のホ舞竹の向と云れたる舞一をいとも玉舞の向と云舞一
の糞と云不魂かて破壁の古ホ舞と云た一ふすへと云

振舞や下座ふなとる去年の雛 去来

け振舞ハ食^{キヤウラウ}食應の振舞あはれけ形あり取あつて云のものを云
物舞とのあはれ詞は多くと云と云と云と云去来の人ハ今年ハ
と云たの去来年の雛ハ今年ふりてと云一さてと云下座ふ
勝らと云自然の人情たる舞一去来を娘の雛ハ今年ハ孫
の雛ハ今年ハと云の雛ハ桃様と云と云と云一其を去来

今午の差別は多く、^以學を底意小會して人情のやるを
 手紙認（認）一已（已）辛くカ老を述べて人小跡（跡）まをを男小句を
 とやうる又上の五文を去来も身おしとくさうささハ
 後人の以五文を子小疑を多すと宜あり去来扱小曰句予
 男子知有りて作五文を古島帽子紙衣ホハいひさうり家
 物ハ下心徹（徹）だ後すーヤ口をーヤの類ハさうをー今（今）の冠
 を垂て伺ひぬハ先師云五文を心（心）をふめてさうハ信徳之人
 の世やみありて十分あるはも振舞ふて堪忍あるーと
 ちけ抄を世の振台世の取ありをいひさうことさうし

疾風ふころすれ船のかる心誌の元 伊賀 菽子

去来扱小曰先師は句を評して曰伊賀の作者は句をさうし
 してた情（情）一ヤ文を云伊賀の化あるを先師とさうり
 ちもて其はさうし先師のつひさうしとさうされハ句を
 おしてさうしとさうし一化（化）をさうしてハ解意を一情一
 何よハ採端のよさうし句をさうし船のかる心誌の元
 といへる百餘年の今解一經一今も船のかる心誌ハ何さ
 それ斗ハ句をさうし元録の始まうハ船の使といふ
 子有りてさうし行若小入れ（行若）醜（醜）を錫小入小蛤を沢山小節
 句の礼と船と衆物にのせ行若を約意にのせ親親
 へ悉くつゝさうし句を船の使といふ（使）後川師宣う画ける
 年中行事と云印本（印本）にその圖ヲ出さう
（原宣ハ天和貞享の以の
人にして京師の産也） 京傳

骨董集にむくし物種といふ書の文を引て出さず
言外に探らされハ穢嫌の場すはるるか
酒の布し心何して年々典春衣と
合せられて舞の祝儀にその使も酒を
ハ思ふやいふされしやこうすま
み下知の詞や使の醉たる言外に
採嬪の場たる舞一こがハ轉すの
為まの義之又女房にのにふま
うされれし子も計しとすま
舞一

桃柳くりにありやとんる子 羽紅

三月上巳の句に柳橋をこま
とよみ舞子なむてそれハ都
柳園の桃を折まぎり睦一
節句を折ま娘の子持る家の
用言外に

この花は憶ふぬとて月哉 鳥巢

桃の花は咲くも田舎のよめ
垣とせハ言あして又折振
子儂あつて夢や隣こ
もなすしついに海一の景
も十分なる舞一

里人の躰た居ゝ〜〜田の標の丸の嵐推

酒の海のつはにして研とままま〜の家おう〜らうで
さらもさらと

茶の十年一お存の心のまは半残

葱のまはハ福のまは濁りて讀盡〜まと云ハ葱類の
惣稱にしてかりまりまりまり福と云ひて云〜は穂の
福のまはまま〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
もま言ふまま〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て

どうもも人の身を〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ひてあら〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
ままと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て

糸を切て白根の嶽をいま桃妖

行もまま〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て
糸を切て白根の嶽をいま桃妖
二のもも思ひ合せ〜まと云ハ一物のまま〜まと云ハ葱のままと云て

いろのほろろもすむや 療 伊賀 園風

にいたずらもやどり候なる月影の一精より二日後に暖和
な空やちの空すもあたるは月の空甲にかるうめくにして興
はも療りの中やもうらたるとあまをを生一この作をさるも
とよふもあまの場へくす

日の影やこもぬ上の親も 珍碩

子雀親もくや影く春季の日の影やこもぬの上と云
に日影りの芥アケネの上小安用と養アサる親雀のさあ陽をこ
あるとは情もあるとこもくくづの情切也

荷鞍ぬむ春のすめや 椽の先 土芳

田家の風情もくぬ椽先か荷鞍おろくく魚もく
子雀の二三羽もてんまををれぬあふさあ豊なる田家の
もよふ言外にある也一雀のよかるといへる雀もさる葉且の句
は解味もあつひ出さるといふあな送りのさあも思はる椽の先
と通たるにて句をちうたう荷鞍ぬむはんと出の趣向也

園のおや 菓をまき へてあく 徳 芭蕉

は向ふ冬も夏春の論何りてやうす一徳は冬も水もりの菓はる
こ小鳥の菓も春もさるもは徳も春の都に上りてあまもさる

夢をいれと評せりされど帰一の從をなす一決をいふ
意を採る時に冬の方を決すも或は先鋒の集中かいつち
る達人より大抵こつやより或は書けやよりちをなすとい
ふ程一團のおや菓をすむといふいふ言外に
守つて菓ハ栖すといふいふ言外してみよの傷ありけ團友
の意をいふ言外するに定めて栖をまひ惑ひて影ハ鳴やまひ
床に寝てさくをすまにと思ひめぐり情をくみまると云ふに力
ありてややむ自心團の我と云に魂のまわりより只菓の字ふ
心身て一向の情を味ふといふ言外するにされと古人此標
を疑むるに已ら力とさうらざちれハ標識者に向て決ま
る

越より花強へりては花のこころ
のあやうきこととらじし道もちのよ
山崎ふさよといひ

就るの菓の樟の枯枝ふ日ハぬ 凡兆

花強の必読のこころハ深谷をさるるにこころよりかると綱を
張て竹籠に編をつくり綱を通しこころ就ふ又別の綱を張け
てこころのこころハ渡るよと花籠に人を入るは籠小舟も綱も
向ふの山あり引又先くこころもこころにもちの通りにてつら
といふも諸々の菓大く春の水をの菓ハ其の種々の菓も新
式抄物をい春とわれハ就るも花類の大なるよとわれ春た

みきり樟はくましく後がけし正字の句意ハ詞中の句意の
その何れもいへば道もなまき山崎にさまよひてくると思
合せ味少き一そ何れぞ哦したる山中の挿板樟の古木
に乾きの葉をいとまき片枝あまうかちみ枯かきたるそれ
まき津く心細きふ日もあかすてと雪の泊りいづくにうとい
うそみ枯枝ふる目の取合せ言外に詞書にいつくは
山中心細くも津くもすゆる

うすくより見えゆる雲のから我 伊賀 石口

くしめくも葉をの句にしく晴の勢をにみくも後がけ
を極もうちがく風と傳やうて雲の木ころむすも雲の玉
たるさめを形容合しる句と共くは枝葉を舞うてくま
いよめつ馬にしくかしくは曲し

てよや待ん 騰りてを春のさる 杉風

は句意味く焼板の辞を作りし句と同葉撰字を身に
てよ春の春色眼茶かよて言外十分の句くるや待ん
て魂 かま 揚を春の春初やて高あうてハ極向之憶良歌
を取れるよりいふの意味は句に合すあり

いさくちく申は拍子や籠子のさ 芭蕉

やよひるの春郊の風景山野の青と海とるさめすれん

あゝのむ盛妻田の掃所と暖和の景色をよみ如きの句の一
句のこゝハ只そよの揚るあゝのむも余にゆゆる中まが
しき、翁子のあゝわろ、おききのよ、いふも力をあせりま
らざる中の拍子取ちるあゝと妻おの眼前にして言外の餘
味控るあゝ一 句中流くくして隆情十分なるハ名人のよのほ
に、て向上のあゝりよく熟練して終玄の境をすかしく流

芭蕉菴のふるまを訪

董王子小鍋洗一 あゝや、これ 曲水

嗟嘆日記ハ昔一 詩小鍋洗ハ一 董王子と有入季奈の時一 曲
やゝきゝ一 書祖翁去来う流掃舎に閑居のあゝり曲水子

江戸に下りて深川芭蕉菴の留書を訪てけ句を作り文の便
りに嗟嘆の巻くあゝり一 嗟嘆日記ハ昔一 董王子と有入季奈の時一 曲
水うあゝの句の註ハ生やう董王子に任於一 菴のすゑを
あゝせよの人を思ふのあゝり一 小鍋洗一 流し字あんと床、
思ふ情言外ハ字あゝり一 思ふあゝり一 思ふあゝり一 思ふあゝり
流やれとせ一 手つ梅の取魂にして志たる志十分にあゝり
堀川百首に昔ハ一 殊々垣根ハあゝり一 流し字あんと床、
すゑのみにてよゝあゝり一 思ふあゝり一 思ふあゝり一 思ふあゝり

木瓜荻旅一 せえ、これ、那、あゝ、山 店

木瓜ハおけ荻ハあゝり一 讀舞一 け木瓜ハ俗にさゝり

といふものからむけひむけのるりか何れ春の
 是に是の中不交りて赤き花を開きてるるものあり
 一君ハくさむけと云ふみも草むけも草ハ刺の何れもの
 して草ハ人の髪をすにむけむれどもその花のさき
 ハ横海素桃山にすれんかの花はさきむれども今が
 るものと言ふハむけむれども花のものを採り多く厚地ハ
 るものありて旅情を傳ゆむれども花はむけむれども
 にもむれぬ花向く旅情に重きを旅子のありともむけ
 直ぐむけ又木瓜勅公勅骨を健むれどももの也旅
 るものありと作しむれども花はむれども花はむれども
 といて風景の句と解むれども花は旅情又むけむれども

畫讚

山吹やうづ治の焙炉の白ふ時 芭蕉

畫讚と何れも山吹を画^{エガキ}や又茶の道具を画^{エガキ}す
 句意ハ山吹といふ茶銘^{チヤメウ}于治の名産なれんが茶銘ハ山吹の
 の色より出する名ある画^{エガキ}とれを物合せの作中^{サカキ}画^{エガキ}の
 ハ物考^{モノカウ}とあり句調のあつて^{ナリ}画^{エガキ}賞^{ウツクシ}す^{ナリ}理^リと^ト解^{トク}す

白玉のあふきいつく 挿うれ 車来

玉のあふきといふ椿^{ツバキ}又さつ^{サツ}の名何れに玉の玉の
 かしら玉のあふきといふ椿^{ツバキ}と白梅^{ハクバイ}の際^{サカイ}白^{シロ}を云ふといふ句

室に遊びし時の句を竹筒に推乃らる下雅小坊
主事の鬼やうらまをてて戯れるさかみかめくうらまの傷
眼前作やうらまをてて風景思ひやうらま

一枝のおもむもさるー山はらら 尚白

山が草ふく咲初もむと一枝まつおてむうーお人のためも思むと
つるの二枝にうらまをててさるーおたおもむもさるーしやう
に漁少とのまもててさるーおたおもむもさるーの字のなつてむいお思を合む
とさおもむく月もさるー白意の山梅を詠入ておてぬんもさるー
さうく思ふ捨てぬんもさるー又おもむくこと捨んもさるーおもむく
して人くとけをを賞せんもさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるー

一枝まつおたるー白意にうらまをてて賞現の心厚切にサカもさるー古人の句
かかたるー白意にうらまをてて除情ぬき味もさるー又おもむくこと捨んもさるー
人おもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるー

鶯のうらまもさるーやま梅 凡兆

人く遊覧する所の山梅人煙遠き深山にさるー
く雞鳴狗吠おするの山里近き山梅風景も詠む
まさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるー
る眼系の奇景ある山梅言外にさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるー
う山梅もさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるー
梅を詠む山梅もさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるーおもむくこと捨んもさるー

しう箭の矢の當りし家のたまち加減ふて矢の速速遠近
あつて何れもさるに何れもさるに何れもさるに加減僅のから
ある場をさるしとさるやれをさるし

花の香と自己警諭の句に常齋のうら志
つれづれに花の香と自己警諭の句に常齋のうら志
子那

堅田本福寺住職花の香と自己警諭の句に常齋のうら志
きてむの何れもさるに何れもさるに何れもさるに
づれづれに花の香と自己警諭の句に常齋のうら志
をづれたるを悔や好むもさるしとさるやれをさるし
風雅心の最上句の表に何れもさるに何れもさるに
僧祇律え午時日影過一髪一瞬即是非時

首句のめりくとも

花の香と自己警諭の句に常齋のうら志
芭蕉

元禄三年庚午の紀行を及の小文と云も守れ句之け句に何
書つるに何れもさるに何れもさるに何れもさるに
いふやうにまたる何れもさるに何れもさるに何れもさるに
しと人のうちさるもさるに何れもさるに何れもさるに
合せて句意をのつるに何れもさるに何れもさるに何れもさるに
乃何れもさるに何れもさるに何れもさるに何れもさるに
云何れもさるに何れもさるに何れもさるに何れもさるに
そ景色の整なるに引かして何れもさるに何れもさるに

千と思ふにつけも物々しく俳諧の洒落たり物々しく
五文字魂子して花に咲けといふ所は御きつゝ儂にやちよこ
「岩持の扱れちよこもたぬ物」
「伊予の阿波無きすれけ奇に面白の意に遠くあやうの察り乃
たゆまといふをかまひあつと花の咲けけを賞美してこれに
瑞ふをぬまえて神の形と形容の洒落向上の作と深く味ふが
花の心も物にこそよめいづる侍者の祖翁の俳意を
にちぬ備たりぬけ句に全く着目乃花を賞する句とよ味ふ
てすぬ」
「此の句に思ひをらすの句に
この國花垣の産いたかしく南丁の八を
撰の料に附らぬると云信入るる物也

一里とて花や女子孫のや

句云とてと合する法はこれか上東門院なるの八を撰を
献するも一物何れも僧侶大に撰うといふや門院の
思ふせられて伊質の玉余聖の産をちて花垣の産と改ては撰の
料に附らぬとてかやされを幸く八重撰を打てたてまつるにん
「伊予の太補取
てましせり」
七父の墓東武谷中にありふえ葉にてふま
北平の後の地お下りぬ墓の前は撰植傳る
よしかく母の物をもつてては撰を

たつ子徒るに他々墓於さるる吟もれ
傳れ

よういーや花吸ふ樽乃 往 還り 園風

詞女としてらー合せてさめ昔の人さう哀情を憐すの安情の誠より
半のりまれの心際いふるま故樽のむくつりなきにあをを譬したる
魂はつて凡俗のうくに遊んよの謙譲の場を思ふなり花に賦
るふも襟の花吸ふといふれにわらうは又まういーやとい
るの詞女の要をふまて一句のうくに凡情つりてササ襟と地とに表
れまうらーやといふるよつ箇にーて往還り尋り尋るさ每言外に足る之
大江の佐時^{ステトキ}父母の死て襟に化したりと看えてるるされ園風
は父乃墓を尋りて身を襟地の如くにやうかへていふれはて彼も是れ親
をさうよの若に一やして自他の美ふれ

知人ふあはしと花に哉 去来

風流人の花の心を吟行す情言外にすれさうもや去来うは道の
蒼蒼の向に何れもれたりとすや去来う花又の情はつらうと子以魂之
と味さる

ある僧の嬉ひー春の都うれ 凡花

ある僧の去来僧都を指し江波抄に曰去来僧都もやとを辞
する時つ道つまの山あきすしとこれおき若う秋はまよはれと
しうりる凡花を思ひて作りるにや花尋ぬるー又石川

丈山もこれに似てゐる人三喜生れて大徳のついでりあるに駿州
清見寺説心長老に参禅して願ふも奥を得たり慶長七年
の役後西藝に遊事して中年禄を辞し四明の麓一乗寺村
に隠遁す平生詩文を嗜み京師に入らざりて誓て「わがうらみ
恨みの少くはきよめられ老の波たつ新もどづ」と詠して終
に洛陽のふらぎも事北余年之を居に本朝の歌仙三十六人乃
例に倣て唐土の詩人三十六人を撰り各其像を画し詩を書き
壁にかけ詩仙堂と号し六々山人と称す八十有餘年して卒す家の集
を覆將曹集と号す去履丈山も志一にして歌に褒貶あるは
僧都丈山地をかへくも志し舞を

浪人のやうな

浪人を或の扱つた

半残

韃ハ和名鈔にむまといふ古名之韃ハ韃の俗字之空穂といふは
粟稔の穂の形に似て中ハ空にして穂乃上へは穂ふりのなる
ものなるなる一文字書に箭室也といふたりもかち人の
知る所の句意なるなるなり武士の俸禄を失ひたる人のせう
一宿して此作にして浪人のたしなるを賞美せし句は合
乃禄にもちぬるハ世の業もなるなり負しくして人にうら
いやめらるるものなるに思ひ合はけ浪人の武を心かけて人の
悔をとるるなるなり城例の俳諧洒落に取て一句のうらに作
浪人もあなづるさハくむらたれあなづりあなづりあなづりハ

武器といふが興もまだ不持して花轅も飾りたるはといふ句
にして花轅乃花といふ字の形容称美の文字さうと志すは
まうと氣輩とまうといふ縁語より取て氣井といふは魂は
理屈をともれ品法のおに氣のたれまうに對しての句に
作りて云外にも良人の志を称讚したるは餘を味ふこ
五七五の文字の上にていさままでの力もなきやうにすこ
きしとすまれと古人句を作るの妙を探るなり瘦たれ
も馬一足銚たれも長刀一本といふ佐野の亭世々凡
情もたれも盡くや

腥きくれつれ中乃かふ哉

伊賀 長眉

け句云外によく探るなり一腥きといふは魂といふは機軸
にして解子かきといふはなまごのなまご云云に縁を
とらる傷の場にして花盛なりは物なまご人の氣も怠り
かちふはほけるは自然の理にしてなまごさきといふは
味ふ無し一酒肴有るなりといふ斗にららるるなり
物なまごさきといふは朝の機軸にいらるるなり
さきなり一されはかふといふは媚怠るといふを云外に
さきなりはつたなり

これもまたさきなりはかふはかきなり

大嘗やうにやう奥の花乃果 曾良

大峯ハ吉野の奥なるれハけ吟有り家を花の果と云といへる句に
して風景大峯山上を眺望し句とすこし花も果も
了りてせむ林麓をうまに咲くをてむとたくりのみすの心
をつきたる詞也

道灌山ふのほる

乃 道灌や花ハ了の代を嵐うれ 嵐草

此句法變例にこそ及ば好むまに何れと俳諧自由のうに
りてハいふも子も子にをともけけおふ作り坐くらんやけ集
探の時に嵐草の變例を探入して一卷おもふとせし
新集し前に秋の都に鞍足うてせけとけ句は例より

例とあるゆへに 暖那集に「かおるや秋ハいろくおふをけけ
れー祖翁の句又同集の越人やりの子にをとも同例し古人乃
詩にハ二四對二六不同下三連の句もこたると同一格なりて熟練
の上ハ唯も妻の通すを要とら私子好む求て未熟乃非車也
作る屋敷事に何れ當今の俳諧者流やけハ傳授の秘事也
ちよといふめハかたさういふも子とされど初學なりすめ
されかくいかにや只やとけとをきふ子をせんを傳授と
るしそきをきく言えたらん上ハやけとやうとむづろし
ま何れ又け句乃やけハ名をれとありといふ人何れも道灌
ハ名をふたけすして持次身入道と思ひやうと作り
懐古の句にして花ハ乃道灌山の花とされど冠乃五文字也

乃薩ハ地名との見えありなむ句なるるなりされ人名
又名ハ神祇釈教等の句ハ二階に切りたり其仔細ありと
いふ事さき未あり一ハ切字にかゝる俳原の論に一ハ切
字さき何れいふなりと心得る初心俳乃論たる一ハ既小
冬の部其角う住吉奉納の句下下ナキに説たり太田持資入道道
灌ハ文明十八年七月廿廿卒其以兩上杉威を争ひ于カンク止クと
ちくる薩文武の戈あり願スる子幸ク一ハ功を立スる代ノのさ
ハ一ハ子をも思ひ今泰平の序代に生れ一ハよろこび拙クき
酒肴を推乃て貴賤花見の興を催ふすといふ事を一ハ乃
うに作て乃薩やのや文字ハ太田道灌の文武を慕ふ又
其代の穂フケヤちウを思ふやの字にしてよび生一のやとけ

よび生一のやハ詠のやに通ひて深意をもちて見ゆる梅咲や
花咲やのやハ字も梅ウと花ハと咲キといふにハ句を作る事ハ
たゞハとさるる一ハこれハ道灌やハ人名の方まされりとさ
そハ地名を思ひやハこれハ入名を思ひるにたゞされと
句意分明なるハ嵐葉乃薩山よのほりて花を咲ク乃薩
極一花と見むも此の代乃中ハさハかキに定てけ桜花
ハ何ハの吹くハとちにてたハるなりといふ意にして
花もさる世を花と思ひたるれといふ意に葉ハけハたハる
この例に同一ヤサの事ハ一朝乃論につく一語一又説た
るも熟練のうんにつくされハ會得ハ一がハ一傳授ハして
人くも場ハに至る事ハを學ぶる一惣て傳授例の句ハみづりに

作るるくば上まのうへ老人乃くんにたつて一譬侍授り
たつて山例の向にまゝ秀逸なる人の作り出するるに
あつたれと一集の模様は白ハつた一耳底記云われ
ハハ花におもひ一野分がといふ教をわき時とれを
紹巴一伝おめておかやうの教ハハお用がまをたられを
たがりて一まゝのこ又ハ年をくもあゝるゝといふけ
ハ後まをまたる五文字をれとまゝとて是ハ連哥の教
ちれも一おかやうのこを例をみづりに作るるるを
まゝとて道灌山ハ東都東叡山の北新堀村の上につる太
田入道、城記と云傳ふ白石紳書に關ノ道觀といふ人の
舊日記とあるより大くしり按に關ハ次良長耀入道といふ

觀と号を谷中感應寺ハ此人の開基にして長耀山と号を
北條氏康の麾下に属し一室に居城す其子長久北條と共に
わろが感應寺に記にたつたり又感應寺の北後ハ長久山本
行寺といふ日宗なりとも長久の開基なるをいふは此
跡ハ同名異人也蓋し一太田入道の高名たるにまゝ衆人
思ふ違て一まゝとて一太田道灌ハ城記ハ西一里に
まゝ稻附村といふ所はあり

源氏の孫を記す

桐子おねちる花の立すゝ 羽紅

源氏須磨巻にゆめれおねちるおねちるの月いとお

けくむの本もやうくさうしてまつたも木陰のいと
 おもい返す庭まうすくあつたりたるそはうとなくす
 ちひて杖乃おれ何とれおれたちまうすその間の
 高樛においかにまてといふまうめぬかまけつをかせ
 たるに對してのうたもゆるや花影衆月上欄干といふ詩
 の侍も思ひ合せうる宵の月うすまになむをまうす樛またり
 てもまうすといふまうす

庚午の歳末を焼く

燒にけりされとも花いちりすま——
 加賀 北枝

庚午ハ元禄三年也北枝ハ加賀金澤の人にして曆刀工ニ兼テ
 北枝

金才一の風騷人にして頗るも室おる人といひ何のたぐもなく
 只觀想の場より出て風心乃向上を志するなり——家を焼失したる
 んいうくるるまあるに風新のなをまひたるといふもんで天災を
 うれひはるかちむるけんやまハ天命を志したれども天命を志
 するものハ事物に心神をうむるま——されかかち家を焼失し
 たるも天命もやまんとて心神をいひは——むるるま——まうすも
 を觀して云外の一句餘情天命を志するの外もあつたりす——
 外ハ物ち——して向上の心中樛樛の影——と其家に北枝の風心
 を見るなり——花いちりすま——といふをよめるまふ——かち
 にけりも天のちりすまぬるに憂ふまにあつたお天命と思ひ安
 する時ハ心をいひま——むるるま——といふもんで花ハ
 漸

いたるといふるに家ハ焼たれども何れも天命を去るれも
て我の心のやうなうと一勾のうみ花ハちりすましと作りたるこ
と名ハ無し一歌ハ世の中に絶て撰らるるを以てむいちりすましの
かゝるましとよめる在五中將の哥乃ろろを以てむいちりすましの
ふ考ふるも一花のちり仕旦とといへるふてのどけきんをすまの
つは十分之素艱難行艱難素貧賤行貧賤の場に安ずるにや

花ちりや伽藍の樞に〜切 凡兆

伽藍ハ精舎の梵語ニ樞ハクルト訓す戸のひぢか子を云ん木
樞繩樞とも云なり茶葉集卷二十ニ久留再久枳作之加多采
等之といひおちる原氏物語なごおくる戸と云伽藍のくろハ

伽藍のくろ戸こそ用き関る故にまうくと鳴るものこもは花ち
るといへるふ夕樞ハ景色をえ入相の以伽藍乃扉もとづ淋しさを
云外ハアサセる夕た〜切ハ音〜切といへる義にして扉をと
づる形容をすする手つまへ又〜と云ふゆふをかけ〜と
と〜又杜牧詩に銀鑰卻收金鎖合月明華落又黃
昏と作まる趣もたはるる〜

海棠の花ハ満〜夜乃月 江戸 普船

海棠の花ハ爛熳〜に満月をかり合せての作〜云外の景色を
揮る盡し一夜深忽懷南枝好把酒更來明月中といへる文
同、海棠の夕を〜付〜た〜る〜や花に倚と〜た〜る〜

つほし眼前の景色をよこし

大和の山崎乃とき

草臥て指さす以や家の志 芭蕉

行脚ハ事死云謂遠離郷里脚行天下脱情損累尋訪
師友求法證悟也予亦六山伏の峯入修切より起れる詞
ちうと具原篤信の説にけり庚子紀行の句に「こゝに文に旅
の具多きハ乃のさうりちる」とありて「おの料に
とかくいふと合羽やうのよの硯華かき等昏筭ちん」と物につ
こは「子宵負たれたいす縁よ」カキとありの語さみそく
るやうりちるをさうりちるたれ物うらみのこゝとありて

けりを生きて又葛の松系に丹波市とありて日暮かきアハ
にと初出をうまハ家の花のさす梢まかりしものかちて斜陽に
ハ殊ハ色すさりのありてまがんの句に詩歌にも夕陽の稱美ハ
まをすてといへに花の長くまがれたるまを曼れはらちちから
ゆりてたをやまのさみえらうまがんの指さすけりて夕陽の
景色を十分にうまはるつ偏す財ていふに花の花を動かぬた
しうりて魂をうま味ハ「吳寛藤花の詩に赤日隔駸陰
偃息可移榻」といふ思ふ合してすこし斜日まを色とす
将賞さるハ和漢同きたり保氏如のこゝに案に四月朔日
以山前の花は花いとおろしうみかたてよのあはれをさ
品ハ又さすんとおろしう盛るまにけりていふて

切わどいも色増るに歌中將と評せうそとつりつわらやとの歌
や花あまたるれまたつねやはめ春のふれ秋を又白氏文集に
惆悵春帰留不從紫藤花下漸黄昏といふもど皆暮春夕
陽の作ら祖公羽の吟はるのうに何たりたももく唯一言下に他
つても餘情ほよよく味ひ考へて探る也

山もや躑躅よけり尾のひねり 探丸

躑躅トビよまたる風景を捜しや山もや尾の長きをほつどの
花にあらよよけ行ハ化の場もよ山もや花けりよをほ
つどに足ほこよ景色の夕也

やるつり海ふんよや夕日影 智月

景色の白にりて海岸の山よまたるつどの夕日影に色景入増し
てよ海水に映むる景色もよれぬ風情もよ漢名に映山紅
といふ名も思ひ合せらる

鬼や角一知花つむ生哉 山川

鬼や角や一妻もよ名秋もよ御花もつむ生にちた
といふ夕日一光陰におもろぬ情も外にすれり鬼角
は彼是といふ義に同一左右にかきてやかや訓もよて詳
根本雑事云鬼頭難得角と云は是と別也

鷺鳥のあしきくもあてより山路が 式之

鷺鳥の山林にすむるにして聲と色とを賞せらるるれにけり
野にけり山路の旅行除寒も去りて暖和なるにそあけけり
さゆ実山山中旅旅の時節にちかたりとてふまゆして外あけり

木曾塚

其春の石もなほに木曾也る 乙列

木曾塚の江州粟津義仲寺に有乎たの物神の木曾塚の唯一塚
粟津の松原へ急行して四月廿日入道とてそのまゝに存す
はまらたりり深田とてまゝにけりてて 詠と打入れ馬の首

も尺のさくさくはふまきまき打とくくはらうんをまきまきを
のふに任人三浦乃石田の島為久村なると云く時に元暦元年止
月廿一日にそは昔しを懐か懐か外あけわけて涙こぼるの
思ひあり石もなほにといふ不最子孫にして人々はまきまき
時のるまきまき石もなほにけりてて 詠と打入れ馬の首
る懐か懐かあてすあけ石馬の杜甫の玉華宮の懐古に美人為黄
土況乃粉黛假當時侍金輿故物獨石馬といへるす 轉作して
そは石馬さくさくといふ一版の子孫に木曾塚の朝日將軍と輝ま
て名だくる勇士数千戦従へ美人さくさくを慮む又巴山吹雪を
いへる打死の前より従ひて武勇の婦人ありて一時天下の
敵なき大將ありてと終一塊の塚とて今ハたはる

美仲寺の僧乃一水を供さるより外文かかづつくものも
と一句の餘情腸も断をぬり或書に梶原の景一摺墨
ハ生嗚ふたれし子をかきし阿波國勝浦といふ所死
して石と成し思ふ合せての作ありき註をよみ人たりし列
俳腸その奇怪なる子を取て作をべき風心に何んぞと志
るこ今戯に旭公昔全盛武客復多才悠々一千年陳
迹惟青苔寂莫向春草悲風湖上来といふん思ひき

春のおとくれ初湊の業心龍曾良

初瀬堂大和國泊瀬山長谷寺本尊十一尊觀世音長二丈六尺佛
工整昔文會也けり祖公羽庚午紀行に云くのあや龍り人かたり

堂の隅といふ句の等敷とよむ再葉の昔良に与へるよや後
うといふふちうの意は行るゆいされど狂翁のうハ初湊といふ
とまう九ハ初湊ふてと題書りけりハ初湊と句中は生いたれど
題をよみけりハ初湊といふ意をよみよしてその本の業あり
あちうハ春宵一刻價千金のそ情意子美新別に
又初湊乃初湊堂とよむの初湊といふまを又生いたる句と
とすむは

望湖水惜春

行春を近江の人とおしとさる 芭蕉

けり近江湖上義仲寺地内無名菴に居たりけり

光に感ずるのふれう人に幽腸の思ひをまきしむるふらげ
人懐きあつてきて以賜る思ひをまきしむるふらげ
近江乃人といふ所の事知らぬ元すうのふらげ
にすうのふらげとて老やくもあんなさぶめちよ
めし思ひつらてふ外の風景を惜む心持を味ひ探
餘人の云ふを聞きし調もさう評するふらげ
杜律_三藍水遠從千澗落玉山_高並兩峰寒明年此會知誰健
作建るふも思ひ合せて雅致同情杜甫の老去て風景を對して秋
かちしむ祖翁の老去て風景に對して秋の風致たり
と沈思して味ひ盡し

秋葉表のし 卷之五終

